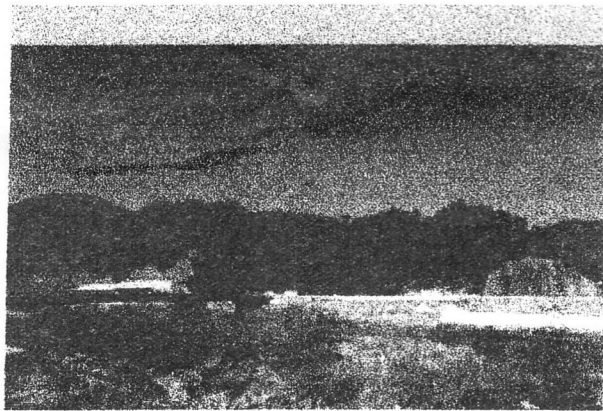


備陽史探訪の会 4月バス例会

**桜花爛漫
安芸穴戸氏興亡の跡を訪ねて**

講師田口義之・住本雄司



五龍城跡

平成 19 年 4 月 8 日実施

**8 時福山駅北口発→10 時高林坊→11 時五龍城跡(昼食)
→13 時半理窓院→14 時半穴戸隆家墓→17 時半福山着**

備陽史探訪の会

〒720-0824 福山市多治米町 5-19-8

五龍城跡

高田郡甲田町上甲立 県史跡

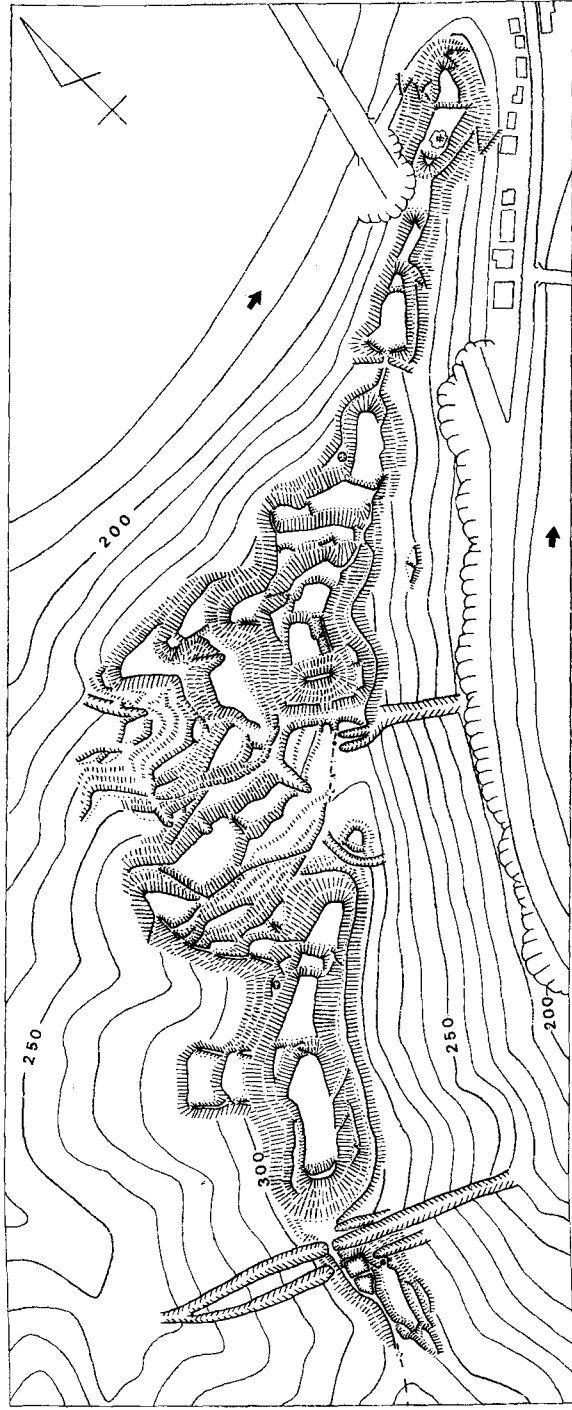
現状 山林，寺社境内地 保存状況 良好 立地 丘陵先端
榛高三一〇m 比高一三〇m

史料 『毛利家文書』六七七、『萩藩閥閥録』卷八〇「井上」，
卷一一九「福井」卷一二四・一「平賀」 卷一二四・二「平賀」

『芸藩通志』卷六八参考文献『甲田町誌』、『高田郡史』、『山城
一 広島県西北部における中世城館の調査一』、『日本城郭大系』

『広島県の主要城跡』
概要

尾根筋上及びその山腹部分約七百×百五十mの範囲に広がる
遺構は，尾根を遮断する堀切と土塁によって三つの郭群に分



五龍城跡略測図 (1 : 4,000)

けることができる。両側を堀切によって区切られる中央部郭群は本城跡の中核をなす部分で、「本丸」「二の丸」「三の丸」などの部名が残る。西側の堀切に面した本丸西端には削り残した高さ約五mの土塁があり，堀底からの高さは約一六mにも及ぶものである。西端の郭群には「御笠丸」の名をもつ郭をはじめとして長大な郭が多い。中央部郭群と同様「御笠丸」西端にも高さ約三mの土塁を置き，その外側は土橋をもつ堀切と堅堀を設けている。本城跡は穴戸氏の居城である。穴戸氏は南北朝期にこの地に移り，当初本村川の対岸菊山の中腹に柳ヶ橋を築きこれに拠ったが，やがてこの五龍城を築き本拠とした。

資料② 『国郡志御用ニ付下調差出帳』 上甲立村

宍戸司箭神

拝殿 石花表一社

御鎮座年月不相知

祭神 宍戸下総守家俊公

祭日 四月四日、六月一日

宍戸下総守家俊公は安芸守元家公の三男にして探瀬彈正隆兼の養子となり探瀬祝屋の城主たり生得胆略の才ありて薙刀剣法を奥州由利某より相伝し給ひ城州愛宕山に祈誓し汲々として寝食を忘れ苦修練磨し結ふ事年ありて瀛奥に至り独歩の武功をなし終に術神に通して空に騰り飛行する事を得給うこゝに於て人望（人間界）の宿志なく天界に入らんことを欲し兵術伝来の奥秘を予州河野大蔵に相接し（今世司箭流長刀貫心流剣術ともに司箭神正統の遺法なり）後覺に伝へん事を遺託し元龜元年四月四日犬飼平より飛去し址を城州愛宕山にかくし給ふ今なを愛宕山本殿の右脇殿宇魂然として蒼生擁護の明眸をたれ給ひ風火及び諸難を祈るに靈応あらざるはなし当山に御鎮座ましまして以来は神徳いちじると言へども文化初の頃より年を追うて参詣の徒多きに至る処也

一 古城山跡

五龍山 横五丁

廻十五丁余

南方麓 大河

北方 北小川

西ハ下小原山統 東は河原

東西九十一、南北九九ツ

御かさの丸、本丸、二の丸、御風呂の段、三の丸、御蔵屋

舗、一位の段、矢倉の段、姫の段、大竹 の段、物見丸、

馬屋の 段、御釜の段、尾崎丸

先年はツリ溝にて池御座候由今に池の跡あり、宍戸家盛勢の時十七万石と申伝候

渡岸寺 御祈願所

応永年中宍戸安芸守朝家公（貞純親王より十五世後裔）常

州より当国へ御下向当村菊山へ城郭を築か せらる（城跡柳

ヶ城と云ふ）其後五龍山御遷城

天正十七己丑の年毛利輝元公広島へ御遷城の時御随移又慶

長六年辛丑の年長州へ御随移

宍戸氏御歴代略

御素性より歴代を略甲立へ御下向の元祖より記

安芸守朝家公、貞純親王より十五世後裔

遠江守基家公

安芸守家秀公

備前寺持朝公

安芸守興家公

安芸守元家公

(深瀬隱居深瀬元祖より朝家公弟左衛門尉知治息男にて常陸国より来)

雅楽頭元源公

弥三郎元家公

右歴代之城と申伝候

安芸守隆家公 (佐伯郡五日市海老屋と申所、安芸郡宮原村

屋希山と申所)

左衛門尉元秀公

備前守元統公 (備後安那郡下御領村備中鬼ノ身城)

ノ十一代 甲立居城

此外数多諸々不分明略之

柳ヶ城 坪山とも言ふ 小山一ヶ所

宍戸安芸守朝家公最初の御城跡当時百姓腰林に候

母ヶ城平 一ヶ所

宍戸の家臣賀屋惣左衛門邸宅の地当時百姓腰林に候、賀屋

氏今も長州にあり

江田氏旧地

宍戸之家臣江田市良左衛門邸宅の地当地御高附島に御座候

後裔長州にあり

長和出雲守旧地一ヶ所

当時末兼の地にて一ヶ所三次郡箱造山に一ヶ所御館御座候
由申伝候宍戸の家臣末兼氏の祖

一、古戦場

柳ヶ城山麓江田 菊山の後口余谷此二ヶ所宍戸氏と和智氏

応永の頃合戦の地と申伝候其他一向古戦場の申伝御座なく候

一、廃寺

天叟寺跡

此脇の山上に物見等の跡と相見へ候様なる土地御座候大石

塔並に古池杜若今に御座候 宍戸氏御菩提所にて長州へ被移

今貞昌寺と申由に御座候

天叟覺隆大居士 文禄二年巳二月五日

椿窓寿久禅定尼 文禄三年三月二日

隆家公御夫婦の御墓にて法号年月碑石に御座候今に至る迄

御年忌の節御代参も有之近世石燈籠等御寄附当村内より花表

建調仕候

菊山址

大平寺跡

先年世羅郡小国村へ移し今尚御座候

菊山址 明星寺跡広島に移され候由申伝候

同 慈恩寺跡

寺跡は高附き島当時荒所に相成候

末兼 本福寺跡

当郡吉田へ移され当時福原坊と申候旧地も御高附田に有之
菊山址 靈源庵跡

許山仏通寺開山仏徳大通禪師隱栖遷化の地にて古墳あり
坊主うね草山

庵屋敷何人の隱栖とも申伝無之候古墳あり
五龍山址 千貫水

昔は山上に湧出世々の城主深く是を愛せられ中にも隆家公
千貫にもかへじと徴言し給ひ夫より呼来候由申伝候当時大道
の下岸に湧出甚だ冷泉にて夏日川魚相はなち候へば忽ち身を
返し一向いきおよぎ得申さず候

銅岩（あかがねいわ）

谷頭と申草山にあり此辺りの石屑皆青赤くサビ色御座候銅
はいどくの煩有之由申伝候

一本松

五龍山の麓大道の端に有之古来一本松と呼来当時も松御座
候

資料③『国郡志御用ニ付下調差出帳』下甲立村

一、名け

真言宗法禅山薬師寺理窓院 寺内凡壹反二畝

京都仁和寺流広島素月山大日寺明星院末寺に御座候

永禄元戊年梅光旭和尚と申僧開基に御座候宍戸元源御願主寛

永四年迄は禅宗にて寺号は元源之御諱号一叟と申候由にて一

叟院と申候処寛永四卯年之比住僧無御座に而石州口羽村真言

宗延命寺弟子権律子社音と申僧住職に相成真言に改宗いたし

寺号理窓院と改明星院末寺に相成候趣に御座候元源御建立之

節寺領百石御付被成候尚又天正五丑年毛利輝元公より百石御

加増合式百石之寺領に御座候由之処福島様御代に被召上候趣

に御座候

永禄元戊年より式百六拾式年に相成候

寛永四卯年より百九拾参年に相成候

宍戸家甲立御在任之節は代々御菩提寺之由にて宍戸隆家公同

元源公同隆忠公同知家御裏方様とも御位牌多く尤も住侶代敷

相分り不申此寺郡中祈禱所として銀八拾目宛毎年郡割に相

調申候

本堂 梁三間半 茅葺 葺替郡中より相成候

桁五間半

庫裏 梁三間

桁五間 茅葺

鐘楼堂 八尺四面瓦葺

護摩堂 式間四面茅葺 葺替郡中より相成候

鎮座稻荷社 壹間四面茅葺 但し理窓院境内に有之同院抱に

御座 候鎮座年月相知れず

同

金比羅社 卷間四面茅葺 但し右同断

同

荒神社 三尺四面茅葺 但し右同断

本尊 大日如来 行基之御作と申伝候

脇立

正如意輪観音

地藏菩薩

弘法大師

阿弥陀

千手観音

護摩堂

本尊薬師如来 行基之御作と申伝候 但し穴戸隆家公守り

本尊御寄附との事に御座候

脇立

(不動明王 毘沙門天 十二天の絵四幅 八祖大師 同四幅

金輪一ツ 差わたし 壹尺貳寸

銘に

奉寄進芸州甲立理相院

元禄九丙子二月源姓穴戸氏就宗と御座候

鐘銘写

当寺者伝聞前芸州大守穴戸元源所勸建也雖是初為禪門之衆園

屢罹兵乱荒蕪年尚矣不知何日密宗道場焉有沙門有看者本石州

之産也来住持常有欲再興於此寺之志不果久歷年序而得遂夙志

恨猶欠鐘魚慈募貴賤之士女鎔鑄洪鐘需之作銘日

功製梵響 直掛堂前 積功不測

果德無辺 額知有項 声徹黄泉

見今獲益 聞今結縁 旅客朝往

樵夫暮還 大守榮幸 檀門欣然

密林勃興 万民安閑

元禄七龍集甲戌五月上浣日広陵明星院成卯誌

当院住持有看法印冶工安芸郡海田村住植木喜平

次藤原直次 庄屋八兵衛尉

二 古墳之事

理窓院本堂後口に古き墓ニツ有之凡長式間横一間位に高四尺

くらいの築石有之其上に大石ニツ御座候無銘に御座候間難相

分尤も穴戸出雲守穴戸孫四郎兩人の墓と申伝候又穴戸弥四郎

夫婦之墓とも申伝候

資料④『国郡志御用ニ付下調差出帳』高田原村

一、真宗道場

高林坊

京都西六条竜ヶ谷山西本願寺下近江国犬上郡種村本行寺下備

後沼隈郡山南村金明山光照寺下同国三次郡上里村明鐘山照林

坊末寺

本堂 十間余

庫裏

経蔵

鐘楼仮立右洪鐘穴戸氏寄附之鐘

門 燒失後無之

本尊阿弥陀如来 木像

春日作也往昔 聖武天皇御后光明皇后御講加智子姫薙髮為

僧当 郡坂邑於山中結草堂此仏尊信而一千日浴人之由故有而

爰安置奉 伝記燒失而不祥其外靈驗略之

阿弥陀仏 木像 聖德太子作也

經石

越後国にて聖德太子鬼人降伏之石也

身替名口ワ三幅紺紙金泥

祖師親鸞上人御筆

略 縁 記

上人ヨリ常陸国多賀之城主祐光授玉ヒ其末流出家而祐安改

祐安 此名号供奉ノ讚州渡海備中ニテ難風頻ニ起船覆ス時ニ

化僧一人 出現シテ今日危難不可遁今我身捨テ汝等ヲ可濟ト

海中ニ飛入玉 ハ不思議哉波濤忽渚キ玉鳥ニ着岸祐安喜急キ

名号之宝函開キ拜 二南無不可思議光如来之無ノ一字失玉フ

祐安歎ニ其夜又一僧示 現曰今日之危遁ハ是名号之利益也故

無一学欠者也トテ光明赫々 ノ西天ニ去玉フ夫ヨリ身替之名

号ト称当山第一之重宝也

十字名号

蓮如上人御準

正信偶文

御同筆

六字名号

御代々連名 准如上人御筆

水晶念珠

天正年中大坂合戦当時四代目念秀勲功依願如上人ヨリ拝領

鏡 一面

脱石 一

葵御紋入团扇 一

右寂如上人ヨリ拝領

仮名御文 二通

本願寺御簾中ヨリ拝領

色紙 一枚

御歌に 一声とねかひしことのかやしきよ

こゝろのおくに囁時鳥

右人皇百二十代良仁親王御筆

掛物ニ休僧都筆一軸

同花敵祖師鳳湛筆一軸

同黄壁性海筆 一軸

甲鏡丸三寸六歩 一面

中祖福万藤佐衛門鏡之由

当山開基浄誓俗姓清和源氏末葉新田大炊助義重七代孫義直

(紀州福万城住す)六代之孫福万藤左衛門武猛メ宍戸是重ス
其宮徳丸出家ノ淨誓改石見国照林坊祐了師弟ト成明応五年
冬大坂山科到蓮如上人実如上人謁奉り伝法之支証トシテ聖
經教品ヲ授り帰国之後又毛利宍戸両家尊教有而甲立五龍山
之麓道場營高林坊ト号淨誓了誓西願ト相統西願ニ至而石丸
山江移ス

開基淨誓ヨリ当代宗緝迄十四代

境内会下

寂定寺 成光寺 教宗寺

末寺

広島猫足町

明教寺 (三代目西願開基故有て七十余年東派に走る)

長州萩

明円寺 三代目西願開基之

当郡深瀬村

教徳寺

岡有留村

西光寺

岡吉田村

高林坊 (但通寺也) 二代目了誓開基也

同吉田村

法専寺

三谷郡糸井村

照善坊

世羅郡津口村

法泉坊

同老歩村

光永寺

同長田村

光源坊

同灰原村

教専寺

豊田郡清武村

蓮教寺

同久芳村

正覚寺

同安宿村

教円寺

同河内村

光泉寺

三次郡原村

覚善寺

中津御領国留村

浄円寺

論考

安芸宍戸氏

会員 住本 雄司

平治の乱に敗れた源氏の棟梁・義朝の十男・知家（母は宇都宮宗綱の娘・八田局）は、平氏の追及を逃れるため、母の実家・宇都宮氏のもとで成長し、八田（はった）を名乗ったが、頼朝挙兵に参陣して御家人となり、厚遇を得、常陸（ひたち）守護として小田（茨城県つくば市）に居を構えた。

その四男・家政が、常陸国宍戸郷（茨城県笠間市）に配され、宍戸氏を名乗ったのが始まりである。

常陸宍戸城 元和二年、水戸徳川家の四支藩の一つとして徳川1万石の陣屋が置かれた。現在は神社になっている。

安芸宍戸氏の始まり 家政から数えて五代目（但し傍流）の朝重（ともしげ）は、足利尊氏の上洛に加わり、六波羅攻めに功あつて、従五位上・安芸守に任ぜられ、甲立荘（広島県安芸高田市）を給わり、朝家（ともいえ）と改名し、給地に移住した。これ以降、安芸守という受領は、宍戸氏の専売特許となる。

五龍城 朝家は、初め、菊山の麓に城を築いたが、水利に恵まれなかつたので、対岸の元木山に五龍王を勧請し、水を得て、その地に五龍城を築いた。五龍王というのは、石見や芸北の神楽の演目であり、暦の知識を、寓話化して農民に教える意図がある。春青・夏赤・秋白・冬黒の四兄から冷遇された土

神・黄龍が、四兄の所領の割譲を求め戦さを仕掛けたが、神様の裁定により、四兄の領地は東西南北と中央に分けられ、黄龍には中央を与え、以後、五兄弟は仲良く暮らした、というもの。春夏秋冬それぞれの季節に土用の日がある事を教えている。当時の民衆は、五龍を、天文・気象・地学を司る神と考えていたのだろう。

後の宍戸氏の始まり 朝家から数えて五代目（嫡流）の興家は、暗愚にして暴虐、周辺武士は離反し、家運は低落した。

時あたかも、常陸宍戸氏（傍流）の元家が、諸国修行の途上で五龍城に立ち寄り、四注八壁と呼ばれる重臣たちは、元家の器量を見て、興家に引退を迫った。五龍城主となった元家は、家風一新の条々を読み聞かせ、重臣たちは忠誠を誓う起請文を提出した。元家は、北隣の中村氏、東隣の辺見氏（三次市秋町）を討つて旧領を奪回し、可愛川（えのかわ）対岸の三吉領を攻めて、川立・長野（志和地）を支配下に収めた。元家以後を「後の宍戸氏」という。

宍戸か、完戸か

「宍戸」は、毛利家文書や萩藩閥閥録の翻刻本では「完戸」と活字化されている。「宍」と「完」どちらが正式な表記なのか。

「宍」の字は、現代人には馴染みがなく、音読みを知る方も皆無ではないか。私も和製漢字と思っていた。実は「ニク」

という音読みがあり、中国では「肉」の異体字に過ぎず、字義は「肉」と同じである。日本では、「宐」は「食用の獣肉」を意味し、「肉」と区別して用いる。つまり「しし鍋」の「しし」である。「しし鍋」は「猪肉の鍋」と考えがちだが、鹿肉の鍋も「しし鍋」である。そもそも「イノシシ」の原義は猪肉、つまり「猪の宐」なのである。同様に鹿肉は「鹿(か)の宐」と呼ぶ。獣肉の鍋は、全て「宐鍋」なのである。中世の文書では、当て字、つまり、訓読みが共通する別の漢字による表記が横行するが、形の似た別の漢字を使用する例は珍しい。「宐」も「完」も、くずすと区別がつかなくなるだけかもしれない。従って「宐戸」と翻刻するのが適切だったのである。

宐戸三兄弟 元家には、元源(もとよし)・隆兼・家俊の三人の子があつた。永正元年(一五〇四)、元家は、五龍城を元源に譲り、隠居して隆兼・家俊とともに、甲田町の東端部・深瀬祝屋(いわや)城に入ったと言われる。隆兼は以後、深瀬氏を名乗る。

宐戸家俊 余り知られていないが、三男・家俊こそ要注意人物である。文化文政期に編纂された「芸藩通志」は、家俊を、隆兼の養子となり祝屋城主だったとするが、面白いのは、宐の神に仕え、難行苦行の末、秘法に通じ、飛行の自由を得たというのだ。その秘法は、河野大蔵という者に伝授され、

元龜元年(元就没年の前年)、深瀬の大飼が原から飛び去って、山城国の愛宕山に入った。愛宕の右脇に祠が現存するという。また、五龍城にも小さな祠があり、司箭(しせん)明神という。そのご神体は、天狗である。「芸藩通志」編纂当時、司箭流の薙刀、貫心流の剣術が行われており、いずれも家俊を始祖とする。司箭神社は、平成の今も、五龍城の尾崎にあり、城の登り口に神社の鳥居が立っている。

司箭流 司箭流の武道は、現在、岡山県の中山和夫氏が十三代目の後継者である。中山氏は、他の古武道も引継ぎ、出身の岡山大学で古武道部師範を勤めておられる。

司箭院興仙 『遙かなる中世』一一号に、東大史料編纂所中世史料部助教・末柄(すえがら)豊氏の興味深い小論がある。

以下その小論によるが、明応三年(一四九四)、近ごろ安芸国から司箭という山伏が上洛し、鞍馬寺で天狗の法を行おう、ともつぱらの噂である。正体を確かめようと、唐橋(からはし)という人物が、東福寺辺の僧侶を引きつれ鞍馬寺へ参ると、管領・細川政元が司箭の宿所に来ていた。夜も更け、彼らと酒を飲んで語るうち、司箭は「法の奥義は、言葉では説明できない」と言つて、短冊に「張良化現大天魔源義経神」と書いて見せたので、僧侶たちは怖がって逃げた、という話が、当時の公家の日記にある。細川政元は、戦国の幕開けともされる前年のクーデターで足利將軍を交代させた中央の実力者

だが、同時に、生涯独身で、修験道に凝り、空中飛行を試みて屋根から落ちてケガするほどの変人でもあった。どうやら、司箭は、政元にとつて心許せる修験仲間だったようだ。六年後の別人の日記には、京都で火事があり、代表的被災者として政元の被官人二人を名指ししているが、その一人が司箭であり、側近として活動していた事を伺わせる。宍戸元家が、隆兼・家俊を連れて祝屋城に入ったとされる永正元年、三条西実隆は、知行地での訴訟について、細川政元の援助を得るため、司箭院興仙という人物に会っており、二年後、司箭院興仙は、僧正に昇格している。「芸藩通志」の愛宕伝説や五龍城の司箭神社の存在などから、司箭院興仙が宍戸家俊と同一人物である事は疑い得まい。

毛利弘元と宍戸氏 元就の父・毛利弘元は、明応九年（一五〇〇）、家督を興元に譲り、多治比猿掛城に退くと、吉田郡山城の幸千代丸陣営とは反対の立場、すなわち、反大内、すなわち、細川政元寄りの活動を展開する。安芸分郡守護・武田氏も同じ立場で、弘元娘が武田某に嫁ぐのもこの頃である。宍戸氏も、元家娘が若狭武田氏の重臣・粟屋氏に嫁いでいる。弘元の時代は、宍戸氏と友好を保っており、興元にも宍戸氏と事を構えぬよう遺言している。これは、足利義植（よしたね）を迎えて上洛を狙う大内氏を警戒し、細川氏から積極的な働きかけがあったからだが、その働きかけが奏功した背景には、

宍戸氏が、家俊に司箭院興仙を通して、細川政元個人と太いパイプを持っていた事が、安芸国衆に大きな心理的影響を与えたものと思われる。

毛利興元と宍戸氏 弘元の死の翌年、一月に高田原（高林坊付近）で、五月には甲立で、毛利氏は宍戸氏と合戦に及ぶ。毛利氏の中でも、幸千代丸陣営は、元々大内氏寄りであり、弘元の喪の明けるのを待って、堰を切ったようになだれ込んだのである。これは、大内の細川の代理戦争に他ならない。政局が不穏になる中、細川政元が四二歳の若さで殺され、宍戸氏は反大内の後ろ盾を失う。この年の暮、大内義興は前將軍を奉じて上洛軍を起し、幸千代丸は元服して興元を名乗ってこれに参陣、宍戸氏も参陣を余儀なくされる。その後、宍戸氏も船岡山合戦では戦功があったようだが、武田氏を警戒して安芸国衆が帰国し、翌永正九年に安芸国衆九名が一揆契約を結んだおりには、安芸宍戸氏の署名が見られない。分郡守護武田氏の支配域に属さない安芸国衆は、正守護山名氏の下で一致した行動を示すが筋だが、反大内の宍戸氏は仲間に入れてもらえなかった。永正十二年になると、武田氏が、厳島神領衆の東西対立に介入する軍事行動を起こした。翌二月、毛利方の中村氏が在城する志和地城を巡り、三吉・宍戸連合と毛利氏の攻防があり、二月、五月には、毛利興元と宍戸元源の合戦が甲立で展開された。これらは、神領で事を

起こした武田氏のけん制のため、興元が、山県郡の有田城を攻めるなど親大内の旗色を鮮明にしたため、反大内の宍戸氏らが、興元の後背を逆にけん制したものである。この慌しい状況下で興元は急死する。元就は、弘元も興元も、酒のせいで早死にしたと明言しているが、その死は、なぜか政局の潮目の変化と密接に連動している。

毛利元就と宍戸氏 元就の代になると、大内対尼子の境目の緊張が備北地域に集中するようになり、毛利氏と宍戸氏は、二大勢力の消長の波を乗り切るため、共同歩調を取る傾向が強まる。反大内の牙城・猿掛城で育った元就は、親大内の兄に娘を嫁入りさせた安芸と石見にまたがる高橋氏に、二歳の長女を人質に出す事を余儀なくされるなどイジメを受けていたので、その高橋氏に北方を脅かされ続けた宍戸氏とは、基本的に相性がよかったのである。高橋氏を滅ぼした毛利氏は、享祿三〜四年、旧高橋領の知行を大内氏に承認されるが、一部を宍戸氏に分与している。大内氏の指示もあるが、宍戸氏が元就の高橋攻めに協力した事実もあったのではない。天文三年、元就は年始の挨拶に五龍城を訪れ、娘と元源の孫・隆家の縁談をまとめた。この事は、江戸期の書物以外に根拠がないが、元就は大内氏の推挙で、前年、従五位下・右馬頭に任ぜられ、官位の格式上、従五位下・宍戸元源と対等になれたばかり。また隆家は、前々年の十五歳の時、大内義隆か

ら一字を頂戴して元服したばかりと思われる。その他の情勢（これを論じると話が長くなるので省略するが）から判断しても、天文三年に婚儀があつたというのは納得性がある。しかし当時、隆元の後、元春の前に生まれた元就娘は、六歳以上十一歳以下であり、露骨な政略結婚ではある。

宍戸隆家 元就が娘を託した元源の孫・隆家は、どういう人物だったか。隆家は、天文七年二十一歳で家督を祖父から継いだ。だが、父は早くに逝っており、叔父・隆忠がよき支えになっていた。しかし隆家は、家臣団の信望厚い隆忠を嫉妬し、讒言を口実に殺害する、という暗い伝説を残している。その後、武人としても、政治家としても、隆家自身の功績は判然としない。（これは、後世に伝えられる宍戸家の古文書自体が、異常に少なすぎるからでもあるが）天文九年、尼子氏が吉田郡山攻めを決意し、三次から可愛（えの）川を遡上する備後路に先遣隊を出す。宍戸軍が祝屋城付近の犬飼が原で撃退した。この時も、隆家というより、隠居の元源や祝屋城主・深瀬隆兼の軍功と考えられる。また、そもそもこの合戦は、史料の裏づけがなく、存在自体が疑われる。が、実子を養子に出したり嫁入りさせたりを通して、安芸国衆を傘下に統合する事を基本戦略とした元就にとって、隆家は、養子に出した元春や隆景と同格の存在だったようである。六十一歳の時に認めた三兄弟への教訓状の中で元就は、「三兄弟と五龍の関

係が少しでも悪化するようでは、それこそ最大の親不孝である」ときつく戒めている。隆家は、次女を吉川元春の嫡子・元長に嫁入りさせ、三兄弟との血のつながりを深めるが、あるいは、元就の意向が背景にあつたかもしれない。続いて、永禄六年、毛利家当主・隆元が急死すると、十一歳にして家督を継いだ幸鶴丸(二年後から輝元は、隆家三女六歳を正室として迎えた。こうして、隆家は、自らの血を毛利一族に注入するチャンスを得たが、元長に子孫の存在は確認できず、輝元も、正室との間に子を授かる事はなかつた。後に萩藩の当主になつたのは、側室の子・秀就であつた。子孫こそ現存しないが、隆家三女その人は、萩・天樹院跡の墓地で、今も輝元の傍らにある。永禄十年、元就は、伊予宇都宮氏の攻撃を受けた伊予河野氏の援助要請に対し、福原貞俊を自身の名代とし、元春・隆景を出兵させるという、大がかりな対応を取つた。この時、隆家も出陣した。河野氏の正室は、隆家の長女だったのである。四年後、元就は七十五歳にして吉田郡山城で他界するが、その当日、小早川隆景が、今後の対応を協議するため城内に呼び集めたのは、宍戸隆家・熊谷信直・福原貞俊・口羽通良の四人であつた。

三丘(みつお)宍戸氏 関が原を迎えた宍戸家当主は、隆家の孫・元統(もとつぐ)であつた。毛利氏が防長二州に押し込められると、元統には、右田一万千石(防府市)が配された。後

に三丘(周南市)の毛利氏(元就七男天野元政の子孫)と領地交換となつた。三丘宍戸氏の石高は、一門衆の中で、右田毛利氏一万六千石に次いで二位だが、家格は、宍戸氏が一門筆頭、右田毛利氏が次席と決められており、毛利元就一族子孫の会「毛利会」のパーティなどでは、今でもこの序列が厳格に守られているという。三丘には、天野元政が慶長八年、元就三十三回忌の際、元就の齒を埋葬したとされる宝篋印塔形式の「齒廟」がある。

三丘城というと、天正三年、伊勢参宮を目的とした上洛を行つた薩摩の島津家久が、その上洛の途上でこの城を見て、「高けれど悪しく候」と自筆日記に記している。(「中書家久公御上京日記」)何がどう気に入らなかつたのか、興味深いところである。

